

書評と紹介

新藤雄介著

『読書装置と知のメディア史』

——近代の書物をめぐる実践』



評者：町田 祐一

本書の紹介

本稿の課題は、新藤雄介著『読書装置と知のメディア史——近代の書物をめぐる実践』（人文書院、2024年）の内容を紹介し、その成果と課題を論じることである。

本書は、明治から昭和戦前期の日本各地の日常生活における書物と人々の関係——読書実践を、巡回文庫や読書会、簡易図書館、パンフレット、読書運動など多様な読書装置と知の受容のありかたから捉えた学術書である。著者は近現代日本のメディア史、社会学を専攻しており、学術論文だけでなく史料の復刻など多くの業績がある。本書は、2019年に東京大学へ提出した博士論文をもとに刊行されたものである。目次と構成は以下の通りである。

序章 問題の所在と本研究の方法

第一部 読書装置の黎明

第一章 明治民権運動における声と活字と書籍館

第二章 明治後期の巡回文庫と地域組織——

図書館から巡回文庫へ

第二部 読書装置の普及

第三章 大正期における文庫の遍在——蔵書の多様化する形態と施設

第四章 大正期における図書館の爆発的増加——簡易図書館と小学校と地域組織

第三部 蔵書なき読書装置の普及

第五章 大正期におけるパンフレット出版と社会主義知識の大衆的浸透——社会運動における学習会・研究会

第六章 昭和初期の社会運動と読書会・研究会

第七章 戦時下の読書運動と読書会

終章 読書装置と書物をめぐる実践の構図

以下順に各章を紹介しよう。序章では、大佛次郎のマルクス『資本論』の読書経験を引き合いに、直接翻訳を読まず、各種の紹介などから知識を得ていた読書（「潜在的読書」）の実態に言及して問題設定を行った。最初に、社会的な知の受容には偏りや不確かさがあること、歴史的な文脈から日常の書物と人々の関係は図書館や文庫だけでなく、そこで行われる関連した行為や活動を含めて捉える必要があること、読むという行為だけでは捉えられない意味の重要性を指摘した。そして、先行研究を図書館史と読書史から整理し、①地域の中の読書装置、②日常における書物をめぐる実践、③地域社会と地域組織の関わりに注目した再構成が必要とした。そしてその史料として、①行政文書・民間文書、②教育・図書館に関する雑誌、③マルクス主義に関する新聞・雑誌、④社会一般に関する新聞・雑誌を用いるとした。

第一部では読書装置の黎明を論じた。第一章

では、自由民権運動の演説における実践と活動を、三大民権新聞などから検討した。集会条例施行以前、民権運動は学校などで政談演説会を行ったものの、集会条例の施行で政談が事前許可制度になったことから懇親会などの形を取り、学術演説であることを戦略的に活用して適用範囲外としていったこと、しかし新聞を声に出して読み上げて解説する新聞解話会は取締まられ、声／活字の政治性の水準が異なっていた経緯にふれた。そして非政治空間として学校・教員の取締が進む中、政治性を回避して学術演説や懇親会の名目で政談を続けた教育令によらない教育施設正道館を紹介、これが書籍館として残ったことで、民権思想は「居場所を確保することができた」とした。

第二章では井伏鱒二の回想を引き合いに、明治30～40年代の地域社会における巡回文庫という読書装置を、小学校・青年会という組織の特質とともに埼玉県を事例に検討した。1909年の巡回文庫導入以前、小学校は学校教育のみならず地域の催事場であり、学校教員は青年の指導者の立場として青年会に関与して書物の閲覧所を設置していたこと、明治40年代に巡回文庫が導入されると積載書籍の選定が県庁の庁員や師範学校長によって行われ、目録が小学校に配布されたことを指摘した。その上で、巡回文庫の機能変化を分析、地域社会の協働の場となる「日常化された催し」に変化し、地域の協働行為と多様な組織を再編する要因になったとした。ただしここでは、教育に収まりきれない曖昧な領域として、日常の娯楽と関わるものが生みだされたとしている。

第二部では読書装置の普及を論じた。第三章では大正期に様々な形で存在した文庫の意義につき、出版文化の拡大状況と設立主体の青年団の特質を、埼玉県を事例に検討した。まず、日露戦争後政府が小学校卒業後の非進学者を引き

受けていた青年団に社会教育上注目し、学力維持と地方教化の観点から図書館や文庫といった蔵書施設の設立を働きかけたことを指摘した。その上で、県内の地域ごとに青年団によって文庫が設立され活動が定着したことを数量的な文庫の所有と利用を含めて分析した。ここから、小学校卒業後の学力衰退の解消策への期待も含んで増設されたが、青年団を中心に娯楽や修養出版物が消費され、講談社の躍進を支えたと論じた。ただしこれらは、宿屋や停車場などへの文庫設置の動きや、教育と関わる要素の浸透が政治性と切り離されて拡大したとしている。

第四章では大正期に市町村私立として公的認可を受けて設立され爆発的に増加した簡易図書館を小学校、図書館、地域社会の関係から捉え、地域住民の書物を巡る実践につき、埼玉県を事例に検討した。地方改良運動の展開後、社会教育の必要性から大正期に小学校と教員の役割が再定位されたことをふまえ、地域教化の中心となった小学校に簡易図書館が国家的記念事業との関わりで設置されたこと、これが地域の寄付金や寄贈図書、運営者となる青年団の関与を受けて地域社会の事業として住民によって展開された経緯を指摘した。その上で行政文書から小学校内の簡易図書館の図面を分析し、閲覧方法の制限や学校関係者の管理などの特徴を指摘し、結果として文部・内務省の政策意図が達成されていたとした。ただしここでは、簡易図書館が書物を収蔵した「文化の場」として肯定視され、教育の枠組みに収まらない文化的価値の意義が生じたとしている。

第三部では蔵書なき読書装置の普及を論じた。第五章では大正期のマルクス主義関係の社会運動における学習会・研究会とパンフレット出版の展開を、学術研究／運動の区分に注目しつつ分析し、「潜在的読書」のありようを検討した。まず、『資本論』は大逆事件後の「冬の

時代」を含めた15年間に解説書の翻訳やマルクス主義の入門書の刊行や翻訳が進んだこと、中でも入門書を解説した山川均のパンフレットである『資本主義のからくり』（1923年）が労働組合や農民組合に浸透したことに注目した。その経緯として山川らは河上肇の雑誌『社会問題研究』がマルクス主義を前面に出した「パンフレット」として翻訳を掲載しながらも「研究」であるために発禁を免れていた先例にならって雑誌創刊に至ったこと、「運動」を模索する中で平易な解説本を刊行するなどして「実社会」への関わりを強め、講演、雑誌、新聞連載を経て『資本主義のからくり』がパンフレットとなって各読者層に対して形態変化しながら受容されていったことを論じた。

第六章では昭和期の社会運動における読書会・研究会を検討した。小学校教員二年目の池田智恵子の経験から、プロレタリア文学にふれた冬期講習会以降、『戦旗』の購読と読書を媒介としたサークルの運営、マルクス主義的研究を行う新興教育研究所発行の『新興教育』の購入と共有などを行っていた社会運動における読書会・研究会の重要性を指摘した。その上で、研究雑誌『マルクス主義』で展開された福本イズムが労働者、農民層などから理解が困難と批判されたこと、『無産者新聞』や『労働農民新聞』などが工場で配布され読者会を通じて組織化に活用されたこと、大衆運動を進めた『戦旗』が読者の組織化に文学作品を入口にしていたことを指摘した。そして労働者や農民から雑誌の難解さへの批判を受けて紙面に「講座」記事を掲載し、平易なテキストを編集方針としたほか、ふり仮名を附すなどしたこと、この結果、読書会や研究会のテキストとしてパンフレット出版の拡大に至ったこと、テキストが地域事情、読者事情を反映し、農民生活の実情に訴える表現を附記するなど改編され、「『資本

論』を読まずとも、『資本論』の内容を知っているという状況を社会的に拡大させた」ことを指摘した。その上で1930年代にかけてパンフレット出版が急増して駅や街頭のスタンドにも売られ、社会的政治的な内容も増えたこと、しかし取締の強化とともに「研究」と「運動」の区分が無効化されたことにふれた。

第七章では左翼運動の文化から広がった読書会が国家運動として実践されていく経緯を検討した。ここでは帝国議会における図書館の戦時体制確立に関する質疑を引き合いに、「悪い読書会」に対する文部省、国家主義勢力の言説を紹介し、マルクス主義と結びついた読書会が1939年以降文部省と大政翼賛会が連動して推進されたこと、ただし図書館関係者は国策遂行の体制が整わず財源の問題、読書指導の困難さの解決を町村長・小学校長を主とした読書指導の対応に求めたこと、その結果、文部省、図書館界、大政翼賛会、産業界、地域団体を一体化させる構想が展開され、文部省が各道府県の中央図書館を中心に指定読書会を推進したことを指摘した。しかし、その主対象であった非高等教育層の読書は娯楽であったこと、読書会は各地の指導者による裁量などもあり、自主性が問題になるなど文部省の意図と異なる効果がありえたことも指摘した。

終章では、本書の課題と方法を各章のまとめをふまえ再確認した。本書の分析結果から、読書装置の固定性と遊動性、書物を巡る実践の読書装置の意味付けを書き換えてきたこと、教化の意図を成功させたのは「マルクス主義の社会運動における読書会・研究会であった」こと、しかしその読書装置の拡大・遍在を達成したのは戦時下の読書会で文部省が実践してきたことであったことを指摘した。そして本書の意義を、図書館史と読書史研究に対峙させ、この「二つの領域にまたがりつつ、さらにその外側

に出る」ものであり、これまでと異なるメディア史研究の成果であることを強調した。最後に、現代社会の様々な読書装置の事例を紹介し、大佛次郎が営んだ貸本屋鎌倉文庫の意義に思いを馳せて、本書を閉じている。

本書の成果と課題

本書の成果の第一は、読書装置のありかたとその機能を、日常空間における広がりをもった歴史像として再構築した点である。本書は各時期の読書装置と読書実践というこれまでの研究で本格的に検討されなかった課題に挑み、その実態を政策や地域社会をふまえつつ抽出することに成功している。日常の営為を捉えた社会史というべき研究と感じた。

第二は、上記の歴史像を斬新な着眼点と多彩な史料で捉えた点である。着眼点として興味深いのは、読書装置として蔵書館、文庫、巡回文庫、簡易図書館、読書会などに注目したこと、そこでの実践から読み解かれた「政治／学術」、「運動／学術」を駆使した人々の権力への挑戦のありかた、そして読書装置の浸透に伴い図らずも成立した読書装置それ自体の文化的価値の創出といった点である。多彩な史料は、公文書館史料の簡易図書館の図面、『資本主義のからくり』の表紙や奥付、民権新聞の悉皆調査、各種図書館利用者統計、埼玉県立図書館の日誌史料などに、筆者の資料収集にかけた多大な労力とその成果が見られる。

第三は、本書で扱う読書装置と読書実践が、知をめぐる権力との闘いであったことを示した点である。第一章の民権運動への取締、第二～四章の学校を拠点にした教化装置としての図書館や文庫利用、第七章の大政翼賛会が思想伝達の際に読書会を設定していくこと等に対する、学術研究や文化価値を根拠とした抵抗のありようを示した点は、これまでの運動史の広がりや

メディア史の視点から捉え直した新しい分析視角といえる。改めて読書という営為の奥深さと、歴史的・社会的な意味を感じる好著である。

一方、本書は読書装置とその機能の抽出、それに対する人々の実践の揺れ幅が主題となっているため、装置／非装置の説明に重点が置かれており、権力や人、社会運動の説明と解釈には物足りなさが残った。例えば、第一章で活字が許容されたことは、民権運動における言論統制の激化があったがゆえではないか。また、第三章の青年団の文庫利用の増加はデモクラシーの影響が大きい要因ではないか。そこに婦人参政権問題などの議論はいかに見られたのだろうか。第六章の小学校教員のマルクス主義への接近はいかなる状況で可能だったか。権力側の動向を見れば、パンフレット、ビラ、講習会は政策宣伝などを常套手段としていたし、「学術」を「政治」に都合よく読み替え、「学術」に「政治」を潜り込ませた言論弾圧の歴史は苛烈を極めていた。これらを考えた時に、本書のテーマは「公」に対する「私」の領域の問題を扱っていたようにも思われたが、関連文献に言及が乏しい点も惜しまれた。

また、読書実践に関しては、社会史や民衆史、ジェンダー史などとの対話が積極的になされると良かったと思われる。人々の読書や語らいは早くから歴史学で注目されてきたことである。例えば、1932年の講演をもとに刊行されたG.ルフェーヴル『革命的群衆』は「集合心性」の形成を分析した古典的著作だが、そこで「情報の伝達は、大抵の場合、口伝えの形で実現された。通信や新聞は、そのおかれていた状態からいって、とても情報をコントロールできなかった」、「語らいについては、印刷物、歌謡、演説などによるプロパガンダもまた、集合心性の形成に寄与しうる」などと指摘されてい

た (G. ルフェーヴル著・二宮宏之訳『革命的群衆』岩波文庫版)。伝達過程での変化に関する踏み込んだ検討はもとより、人々の主体的営為としての情報伝達というメディア史を考えた時に、本書で明らかにされた近代日本の読書実践はいかなる位置づけになるかはまとめに記すべきであったように思われた。また、敗戦後の読書装置が教養主義・教養文化の衰退の経緯と関わりつつ、知的基盤や社会運動をいかに規定したのかも、現在の状況を問い直す上で欠かせないはずである。

もっとも、以上の課題は本書の知見を些かも損なうものではない。説得的な論証と膨大な史料に裏打ちされた知見は、読書経験、知的営為の歴史像を刷新し、読書離れの著しい現代に多くの議論を喚起するはずである。読書子に一読を勧めるとともに学際的な議論を求めたい。

(新藤雄介著『読書装置と知のメディア史——近代の書物をめぐる実践』人文書院, 2024年2月, 400頁, 定価4,500円+税)

(まちだ・ゆういち 日本大学生産工学部准教授)